
それを守るために・・・。

トラナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それを守るために・・・。

【Nコード】

N2943BA

【作者名】

トラナ

【あらすじ】

輝来^{きき} 香純^{かすみ}は、地域でも有名な大会社に就職後、丸3年が過ぎようとしていた。会社、いきつけの飲み屋、自宅でごく普通に過ごしていたある日、感情をまるで表現しない一人の女性と偶然に出会う。そして、その女性とのやりとりから、自らの日常を見つめ直し、やがて困難に対して挑む事を決めた。大切な事を守るために必要なこと。時に仕事、恋愛、友情あり。フィクションサリーマンドラマ。

序章

「俺はそれを選ばない。選ばないことを決めたんだ・・・。」

朝、目が覚めると鳥達は窓辺に集まり鳴いていた。いったい何時になったのだろうかかすみと香純は、ベットの端に置いてある時計を手に取り、時刻を確認して一つ大きな欠伸をした。「7時か・・・。」布団から起き出し窓を開けると、鳥達はいつせいに飛び立っていった。空は真つ青に晴れ渡っていた。「今日もいい天気だ。」季節は11月の半ば頃。吐く息も、いくらか白くなってきた。台所へ行き、香純はいつも通り適当に朝食を済ませ、出勤の準備を整え自宅を出た。最寄駅は、歩いて10分もかからない。道路を歩き出すと、いちようの木が黄色く並んでいた。アスファルトの上にはその葉がひらひらと舞い始めていた。やがて駅に着き、改札を抜けた。すでに今日も電車を待つ大勢の人で、辺りは埋め尽くされていた。皆、片手には携帯電話や新聞を手に取り、下を向いている。香純も電車を待つ少しの間、皆と同じようにしていた。電車がホームにがたごとと音を立てて入ってきて、乗り降り口が開いた。中から人が降りてきた後、いつせいに駆け寄る。ようやく電車に乗り込むと、中は当然すでに満員だった。そのため車内では片手で鞆を抱えて、もう一方では新聞を小さく折りたたんで持つのが日課となっていた。なぜそうするのかというと、女性に対する対策だった。両手なるべく高く上げて両手が塞がっていれば、万が一、周囲で痴漢が発生したとしても、自分はこのようにしているため間違われることはない。満員電車の中に乗る男性には、特に気をつけなければならないことだ。しばらく電車に揺られ、会社の近くの駅に着いた。改札を抜け再び歩き出すと、会社までの距離も自宅から最寄り駅までと、さほど変わらなかった。途中には、いきつけの飲み屋があり、その角を

曲がりしばらくすると大きなビルが立ち並んでいる。その一本のビルが、香純の職場であった。そして今日も、無事会社に辿り着いた。地域でも有名でそれなりに大きな企業であり、香純が就職してからすでに丸3年が過ぎようとしていた。ビルへと向かう通りは毎日きれいに整備されていて、ごみ一つ落ちていなかった。そのビルの自動ドアに近づき、中に入った後タイムカードに打刻した。そしてエレベーターに乗り、7階の職場へと向かった。

「おはようございます。」と職場のフロアに入る時、先に出勤している他の社員に一言挨拶するが、いつも通り返事がない。「またか・・・。」と、ため息をついて自分の座席へと向かった。この職場では、社員間の挨拶の習慣がまるでなかった。例えば、自分が親しい人とは朝からよく話す、そうでない人とは丸一日会話をしない。そのようなことは、ごくごく普通の状況であった。香純は、この職場環境にほとんど嫌気が差していた。社会人となった後、現在の会社を好んで選択し就職したわけではなかったこともあるが、学生じゃあるまいし、毎日毎日、このような状況で仕事をするに、いったい何の意味があるのだろうか、とさえ最近では思うようになっていた。当然、このような職場環境の中、仕事の能率が上がるわけもなく、毎日ただ時間が過ぎることだけを願っていた。座席に着き、書類を整理していると、「よう。今日も冴えない顔してるな。ははは。」と、背広を着た一人の年配の男が声をかけてきた。男は続けて、「まだいくら時間があるから、コーヒーでも飲みにいこう。お前のおごりで。ははは。」と、香純を誘ってきた。「毎日のことですから。林松さん。」と香純は男に返事をした。香純には、入社当時から世話になっている先輩社員がいた。それがこの林松であった。歳は50代後半だが、歳の割には若く見える。役職はなく、社員の教育係りを長年受け持っていた。香純にとっては、この先輩の存在により、まだかろうじて出勤しようと思っっているといっても

過言ではない、そういう人物だった。

「しかしよう。最近特に、まるでやる気が消えちまったよな。」
林松は、コーヒーズをずりとりながら香純に言った。香純は無言で、100円を自販機に入れてコーヒーズが出来上がるのを待っていた。すると林松は、「まあ、言いたいこともあるんだろうけどよこれが、ここの独特の雰囲気なんだよな。仕方ねえよ。」と、いつものように言った。香純は大概、はい、そうですね、などと調子を合わせていたのだが、こうして毎日声をかけてくる先輩には、少し話をして置いた方がいいだろうと思い、「林松さん。仕事後、一杯どうですか。」と誘ってみた。すると林松は驚いた様子で、「なに珍しいな。お前から誘ってくるなんて。」と、香純の顔をじつと見て言った。香純も同様に、林松の顔をじつと見て「場所は、いつものところでいいですか。」と尋ねた。「ああ。何か話がありそうだな。まあ、仕事終わったら電話してみてくれよ。俺は先に一杯やるかもしれないけどな。ははは。あ、それと、お前のおごりだぞ。わははは。」と、笑いながらその場を去っていった。

香純は、何も言わずに残っていたコーヒーズを一気に飲み干し、座席へと戻った。そして今日は残業をしないために、いつもより短時間で仕事をこなし、終業の合図を待っていた。すると課長級である森上^{もりがみ}が、「輝来君^{きき}、ちょっとこっちへ。」と、手招きしながら呼び寄せた。「あ、はい。」と、香純は座席を立ち上がり、森上のデスクに向かった。森上は、小指を立ててボールペンを手に取り、「輝来君、残業。大丈夫だよな。」と、言った。それを聞き、「はあ。いつもは放っておくのに、また今日に限って。」と、香純は心の中でうんざりしながらも、「あいう。今日は用事があるので、定時で上がります。急ぎの件については、明日終了の見込みがつかしました

ので・・・。」と伝えた。すると森上は、「あのさ。君も3年くらいになるよね、うちに来てから。毎日、皆が黙って残業しているのは知っているよね。用事があるなら、午前中の内にも私に一言伝えておいてくれると良かったよね。わかるかな。」と、香純に問いかけた。香純は、そんなこと百も承知の上だった。この職場では、午前中にそうした手順を踏んだとしても、残業になる可能性がさらに高まるのを、もはや勉強済みであつたからだ。「はあ。しかし、今日はどうしても都合がつかないもので・・・。」と、静かに伝えると森上は、「ちよつと湖曽君。」と、近くを通りかかった女を呼び止めた。湖曽は、「はい。なんでしょう。」と、足を止めて振り返り言った。「輝来君、今日は残業しないで帰るから、後お願いね。」と、森上が簡単に伝えると、湖層は眉をしかめて「え・・・。残業しないんですか・・・。はい・・・。わかりました。」と、さつとその場を立ち去り、湖層の周囲にいる社員に耳打ちし始めた。「さ。じゃあ、今度からはそのようにして下さいね。」と森上は、再び小指を立てながら湯のみを掴んで言った。香純はその場で一礼をして座席に戻ろうとすると、ちよつと終業の合図がフロアに鳴り響いた。それを聞きながら、「お先に失礼します。」と、周囲でまだ耳打ちしている他の社員に一声掛けながら、職場を後にした。

会社の自動ドアを抜けるとほぼ同時に、香純は携帯電話を手に取り、まずなじみの居酒屋へ予約を取るために電話をした。「・・・。はい。」と、いつものおかみさんの声がした。「あのう、輝来ですが。」と香純が言うと同時に、「あ、はい。あのね、もうさつきから嬉しそうにしていつもの親方が先にやってるよ。予約だつて大丈夫よ。仕事終わったらいつでもいらっしゃい。じゃあね。」と、名前しか名乗らぬ内に、用事は済んでしまった。ははは。と、一人笑いながら香純はいきつけの店に足を進めた。

序章（後書き）

「真実とは。」を書きましたトラナです。前作を読んで下さった本当に大勢の方々、ありがとうございました。さて、今回ですが、とあるサラリーマンを主人公にして、一つのフィクションドラマが執筆開始することとなりました。この小説も前作同様、連載型短編小説という構成となります。尚、更新は週2回を目標にしておりますが、あくまで目標ですのでご了承下さい。それでは、次回予告です。

香純は先輩である林松に、仕事への不満や相談を持ちかける。そこで感情を出さない不思議な女性に会う。次回、感情を出さない理由。お楽しみに。

感情を出さない理由。 1

いきつけの居酒屋に向けて、香純は足早に店へと向かった。この時間、この通りを歩いている人は若干少なめだが、中でもコートやビジネスジャケットの中年の姿は目立つ方である。香純が入社してからこの間、定時で会社を出ることは指折り数える程度であった。久々に心躍るような気持ちを抑えつつ、晩秋の街中を背に歩いていた。店に着くと、辺りはすでに陰ろうとしていた。赤い暖簾をくぐる様にして横開きの扉をがらりと開けると、中からおでんの良い香りがする。それと共に、早速大きな声が鳴り響いた。「いらっしゃい。待ってたよ。」いつものおかみが香純を出迎えた。「今日はいつともより随分早いねえ。明日土曜日だから今日は一杯と言わず、遠慮なく呑んでつてねえ。」と、おかみは笑顔でいつもの座敷へと行く途中に言った。香純は、普段であれば「いやあ、あんまり呑まないから・・・。」などと、どこか遠慮がちにいうのが常であったが、今日は「ああ・・・。そうするよ。」と、この店に来るようになって始めてまともに返事をした。おかみは香純の言葉を聞き、今日はあの親方と何か話があるなと一人思った。「親方は、なんだか嬉しそうに店が開いたと同時に来て、先にやつてるよ。」と、林松がいる座敷に近づくにつれ次第に小声にしながら香純に言った。「はあ。そうですか。」と、答えるとおかみは「はやしさん。開けますよー。」と、襖の前で声を放った。すると中から「おお。入って来い。」と、威勢のいい声がした。おかみは一人、ひひひとぶきみな笑みを浮かべながら「さ。どうぞ。」と、香純を案内した。

「おお。早かったな。」と、林松はいくらか赤い顔をして、香純に声をかけた。「はあ。今日は林松さんより早く来たと思っていたのですが・・・。」と、いくらか残念そうに香純が言うと、「はは

ん。俺を誰だと思っているんじゃない。ここだけの話な。仕事なんぞ、15時には切り上げてきたぞい。わはは。」と、得意そうに言った。「15時ですか。」と香純が林松に問いかけると、「ああ。」と、笑顔で答えジョッキのビールをぐいと一息に飲み干した。「っはあ。ようし、今日は呑んだるか。ビール二人分、頼むわ。」と林松が、上機嫌でおかみに伝えると「はいよ。待っててねえ。」と、若い娘のような声で厨房へと勢いよく向かっていった。それを確認した林松は、「なんだい。今日はえらく早かったなあ。」と、香純に言った。すると香純は、「ええ。こっちから誘っておいて、林松さんを待たせる訳にはいきませんから。」と、照れくさそうに言った。「待ったぞ。俺は16時からずっと今まで待ってたんだ。はははは。」と言うと、手拭を香純の胸元へ軽く投げて言った。香純は心の中で、「今日は、話どころではなくなるかもな。」と、一人この時思った。やがて、先ほど注文した品が届いた。おかみがビールをそれぞれの手元に置くと二人に耳打ちするように小声で、「あのねえ。今日、新しいバイトの娘が来る日なのよ。内緒よ。」と、嬉しそうに二人に伝えた。林松と香純は、お互い顔を覗き込むようにしてお互いを見合った。「なに。新入りかい。そりゃあ、楽しみだなあ。」と一際大きな声で林松が言うと、おかみが手を横に振り、慌てた様子で「ちよ、ちよつと。声がでかいよ。しーっ。」と、林松をなだめるように言った。

「なんだよ、別にいいじゃねえか。」と林松がおかみに言うと、「他のお客には誰にも言っていないのよ。だから・・・ねえ。それでその娘がここに来た時には、何か声をかけてやってくれないかねえ。はやしさんと、かすみくん。お願いねえ。」と、言うときまた厨房へと消えていった。

それぞれのジョッキで乾杯後、しばらく世間話のような林松のいつもの会話が始まった。そしてひと段落した頃、そろそろ本題を話

し始めようかと思い、香純は「あのう。林松さん。実は・・・。」と、改まって問いかけた。「ああ。なんだい。」と、ぶつきらばうにいつもの調子で返事をした林松に「俺、もうあの会社を辞めようかと思ってるんです。」と、直球で伝えた。すると林松は、ああ、やっぱりというような表情を浮かべながら「お前もか。実は俺もなんだよ。気が合うな。わははははは。」と、一蹴した。まじめに話そうとしていた香純は、自ら予想していた対応と全く違ったため、あっけにと取られてしまった。当然、次の言葉が見当たらなかったの で思わず一緒に笑ってしまった。しばらくして林松は、「ははは。笑っちゃうよなあ。でもよう。今思えば、普段お前にきついことを今までに言ったりしてきたこともあったけどよ。今考えてみると、俺にとっては本当どうでもいいようなことが実に多いんだよなあ。ははは。」と、また笑いだした。それを聞き香純は、今日はもうこれ以上話さず、林松の話を聞くことにしようと思った。ちょうどその時であった。

「失礼してもよろしいでしょうか。」と、女性の細い声で確かに香純には聞こえた。しかし、林松は全く反応がなく、「ははは。いや、あの時はさあ。」などと、すでに一人でその話題に突き進む準備が整っていたところであった。「あの、あの。誰か来たみたいですよけど・・・。」と、話に夢中になっている林松に割って入るように言った。すると林松は、「なあにい。まだ話は終わってないんじゃない。」と、その場で一喝した。すると、襖の向こうで「わかりました。失礼しました。」と言って、女性はその場を物音一つ立てず、立ち去ったようだった。香純は、少し慌てて「いや、あの。」と、とつさに襖を開けたのだが、そこにはすでに誰もいなかった。林松は、どこか開き直って「いや、俺はお前に言ったんだが・・・。なんだかな。ははは。」と、ばつが悪そうにしていた。そして続けて、「おい、俺と一緒に会社を辞める、そのお前。あの娘を呼び

止めてこんかい。」と、香純に言い放った。香純は、「え。いやあ。別に、今は仕方ないですよ。たぶん。」と、なだめるように言ったのだが、後の始末であった。当然香純は、そのまましぶしぶ席を立ち、カウンターのあるフロアの方へ向かっていった。

カウンターには、すでに何人かのお客が席に着いていた。厨房では、おかみがいつものように忙しくしていた。その少し離れたところで、ジーパン姿にピンク色のエプロンをつけた、見慣れない若い女性がいた。年の頃は、20代前半。髪は後ろで一つに束ねられていたが、恐らく肩まではあるだろう。割と小柄な雰囲気だと、遠目でみて思った。香純が近づくと、カウンターのお客の大きな声があった。「いやあ、いいねえ。おかみよりも若い女が店に来て、こりゃお酒が進むよ。ははは。」と、その客が言っていると、厨房の中にいるおかみが、「おかみよりも、じゃなくて、おかみと同じくらい若くてでしょ。」と、声を張り上げた。するとカウンターのお客は、皆でげらげらと大声で笑い出した。その隅で、その新入りの若い女性は、静かに笑いもせず皿を拭いていた。そこへ、「あのう。」と香純が近づき声をかけた。すると、無表情で振り向き「はい。」とその女性性は答えた。香純は、「あのう。先ほど、奥の座敷に来ましたか。」と、問いかけた。その女性の大きな目は、ぱつと見開いたまま「はい。行きましたが、お話中ということで、こちらへ戻ってきました。」と淡々と答えた。それを聞き香純は「あ。それなんですけど、それは会話の中での話でして。あなたに言ったことではなかったのです。ですから、一度一緒に奥に来てもらえませんか。」と、問いかけた。すると「はい。わかりました。」と、その女性が答えた。その時、カウンターで冗談を言って笑っていた客が、「おいおい、兄ちゃん。もうナンパかい。手が早いなあ。俺が目を話した隙にこれだもの。いやあ、最近の若い奴にはかなわんわ。」と、からかうように言った。すると、香純は少しむきになって、「また、そんなこ

と云つて。おやっさんにはおかみさんがいるじゃないですか。」「と言った。そのカウンターのおやっさんはそれを聞き、「ま、まあな。」「と少し照れたように言つて、ぐいとビールを飲み干した。

感情を出さない理由。 1（後書き）

閉店後、新入り店員とおかみ、香純と林松の4人で入店祝いを兼ねて乾杯することになる。おかみは、あることが少し気になっていた。それは、いったい何であるのだろうか。次回、感情を出さない理由。 2 お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2943ba/>

それを守るために・・・。

2012年1月12日22時45分発行